

# Viator

VOL.27



## 御降誕おめでとうございます

北白川教会主任司祭ウィリアム神父

闇の中を歩んでいた民は大いなる光を見た。  
死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が輝いた。

(イザヤ9・1)

北白川教会のみなさま、ご降誕にあたり、主の平和と喜びを申し上げます。

2019年は11月に教皇フランシスコが来日されました。みなさまの中にも、長崎や東京で

教皇ミサにあずかった人がいるでしょうし、インターネットでミサの様子を見ながら一緒に祈りをささげた人もいたかもしれません。日本中のカトリック教会にとって大きな励みとなる訪日で

した。私たちも福者の信仰に倣い、正しい者になりたいと願います。教皇フランシスコはご自身のツイッターのなかで次のように述べておられます。

「教会は改宗を通じて成長するのではなく、引き付ける力によって成長するのです」。

たしかに、私たちキリスト者には宣教の使命が与えられています。しかし、それは洗礼を受ける人の人数で競ったり、信者の数を誇るものではありません。イエスは宣教旅行の中で、洗礼を授けて回ったわけではありませんでした。イエスの御言葉、行動、まなざしが人々を神への回心へ導いたことを心に留めたいと思います。キリスト者は、キリストを頭とするからだの手足です。手や足は大きな声で叫ぶことはありませんが、行動によって自身の存在をアピールします。宣教の使命を果たすには、まず私たちの生活が神の救いのあかしとならなくてははいけません。

さて、イエスによって、光が私たちの歴史にやってきました。私たちは、人類を揺り動かしている不確実性の時代の中で、明かりをとむすためにイエスが来られることを希望しています。感染症の拡大する時代にあつて、エマニュエルは私たち

が光り輝くよう、そして最も弱い兄弟姉妹の隣人となるよう招いています。そして、その兄弟一人一人と連帯して関わりを持ち、その世話をするやり方を生み出すよう願っているのです。神が誕生し、私たちの仲間の一人となったということは、私たちが再び生まれ、また希望を再び強めるようにとの呼びかけを意味するものです。これは私たちが、隣人に誠意をつくし、一致する道にあつての模範となるためなのです。

この分かちあいの祝いの時にあつて、少し歩みを緩め、すばらしい現実を活用しようではありませんか。この年のすばらしい時期がこれまでにないあり方で、みなさまの心に響きますように。みなさまのご多幸が今日だけではなく、2021年にもありますように。

新年が活力にあふれ、穏やかな年であるとともに、はつらつとした年となり、主イエス・キリストへ向かう道にあつて、さまざまな祝福に満たされますように。いつも目を覚ましていて、孤独な誰かを無視せず、意識していきたいと思います。

御降誕おめでとうございます。2021年が光り輝くものとなりますように。

## ベリーニ神父様のおもいで Remembering Fr. Bellini

M. J. と Y.

2004年イタリアに一時帰国され、翌年再び日本に帰ってこられたベリーニ神父様からお会いしたいという連絡を頂戴しました。拙宅近くのレストランに来られた神父様はまるで歌舞伎の隈取りのように目の周りが真っ黒で、やつれ切ったように見えまたした。腸（はらわた）がちぎれるような思いを味わった人が、時々見せる子供のような微笑みを浮かべる時でさえも苦しそうに見えたものです。三人共ほとんど無言だったように記憶

J. M.

It all began one day in 2005 when the phone rang. Just back from a year in Italy, Fr. Lino Bellini wanted to see us. We met for supper at a restaurant near our home, where he arrived looking unexpectedly haggard. Even his accustomed childlike and innocent smile barely appeared that evening. I remember the almost total silence during the meal. Sensing a need, my wife said, "If Joe is told he needs a few more points to get a ticket into heaven, please

しています。うちの人が「如何でしょう、神父様、マカダムが“神の国行き”のチケットをいただくのに、もう少しポイントが足りないといわれましたら、どうか彼に手を貸してください。その代わり、たいしたことは出来ませんが、時々ご飯をご一緒にお願ひできませんか」と申しました。しかしあまりに小さな声でしたので、正確には聞こえたかどうかわかりませんが、それから三人の奇妙なレストラン通いが始まったのです。

すぐ私たち二人は四つのキーワードに気が付きました。イタリア人、ザベリオ会、司祭、宣教。「私たちの使命は、まだ認識されていないところで神の国を宣言する」というザベリオ会の精神と、社交的なイタリア人であること、また宣教について話し始めたら、何が何でも止まらないこと、神父様であること。特にザベリオ会の使命について話すときは、口角泡を飛ばすさまで特に熱がこもったものです。私共が話す時はときどき相槌を打つぐらいのもので、もちろん神父様は実り豊かな話し手であり、又常に改革者でありたいと願っておられたと思うのですが、残念ながら、他者に短時間で、しかも少ない言葉で自身の思いを伝えることは甚だ苦手であったように思います。何しろ、神父様の前に料理のお皿が並ぶほど話が続くのですから。シェフは何か気にいらなかったのかと、聞きに来る始末でウエイターと顔を見合わせるほどでした。神父様は、自分の思いをどうしても伝えなかったのではないのでしょうか。レストラン通いと言えば、めったに行かなかったホテルのバーでシャンパングラスを割って青くなった神父様。おいしい小さな店をとっても喜ばれたこと。記念日のバラの花がお好きだったこと。間違えたレストランに行かれたこと、など、長年の間の色々な思い出があふれるように目に浮かんできます。詳しく書けないのが残念です。

最初に二人で神父様の家を訪問した時の感動は

lend him a hand. In return, it may not be much, but how about enjoying some meals together.” She said it in such a low voice, however, that we never did know for sure whether he heard her or not. Be that as it may, that was the start of our rather special visits to restaurants.

My wife and I soon found four key words to help us better understand Fr. Bellini: Italian, Xaverian, Priest, Missionary. He was an engaging Italian priest, who could talk endlessly when the topic of conversation concerned the work of the church, particularly the Xaverian missions. The guiding spirit of the Xaverians is, after all, “to proclaim the Kingdom in places where it is still not recognised” (Xaverian Constitution). On such occasions, my wife and I could contribute little more than nods.

Fr. Bellini was a fruitful speaker who I suspect dreamed of becoming a reformer, but one thing he found hard was to express his thoughts briefly. In a restaurant, he could be oblivious to the dishes gradually piling up in front of him. A chef would occasionally come to our table to check, worried that something might be wrong,

Some quick memories: About restaurants, I recall one of the few times we went to a hotel bar, where he broke a champagne glass and blushed a bright red; also, his delight in small restaurants; his joy at the bouquets of flowers we gave him on the anniversary of his ordination and other special occasions; the day he went to the wrong restaurant and the panic that ensued, and so on: a host of memories gathered over the years, too many to describe in detail now.

Recalling our first visit to his home triggers more memories. Notable was the large collection of books lining the walls. A quick

忘れられません。たくさんのしかも立派な本が架蔵されておりました。日本語の本も多く、仏教関係の本が目立ちましたね。また美を愛し、とくに彼のペンシル画のうまさに驚いたのです。典礼から神へ、つまり典礼の中のミサ、音楽など、神との密接な関係がある美の重要性をよく話し合ったものです。偶然に出会った誰に対しても宣教を説き、しかもユーモアでもって有意義な会話をしようとされたのです。彼自身は決して大まじめになることはなく、よく聖ヨハネ・ボスコの言っていた” a sad saint is a sorry saint” (悲しい聖人は気の毒な聖人です) を引用して悲しい聖人を笑い飛ばしておりました。

ベリーニ神父様は何時間も話せる体力と知的エネルギーをもち、最後に私たちが疲れてきますと、今日は長すぎましたね、と毎回言われるのです。考えますと、さすがの神父様もいつも長時間人々と話しますと、疲れてしまって、エネルギーの充電が必要になりますね。神父様にとっては、孤独な生活でなければ充電できなかったのではないのでしょうか。とくに仏教との霊的交流に熱心に取り組み、誰に対しても、何に対しても常にオープンにしていた彼の姿からみて、一人で生活することが必要だったのでしょうか。

死期が近づいた時でさえも、彼の宣教への熱意は最後まで失われることはありませんでした。電話で、ホスピスの中で偶然知り合った人々が如何にキリスト教を知らないかと驚き、残されていた僅かな時間を宣教のために使ったのです。また、私にとって印象深かったことは神父様の聖フランシスコ・ザビエルへの献身でした。前に、手で十字架を持ち、死んでいくザビエルの絵を送信してくれましたが、神父様はこの絵に強い愛着を持っておりました。死期がいよいよ迫ってきた時、許す救い主としての、また友達としてのイエズスに対するベリーニ神父様の全くの信頼は私に特別な

glance revealed many books in Japanese, Buddhism prominent among them. He had, of course, spent several years studying Buddhism during his early years in Japan. Art books, too, figured prominently. He loved the beauty in art and could draw remarkably well. Talk of beauty often led him to ponder music and other forms of the liturgy, with the Mass at its centre. He saw all of these as expressions of beauty, opening up into God. The link between beauty and God was fundamental for him.

He was keen to talk about Christianity with people he met by chance, believing that any conversation could lead a person closer to God. This he always did with an underlying current of humour. He never took himself too seriously, believing, in the words of Don Bosco that he liked to quote, that “a sad saint is a sorry saint” .

To carry on a long conversation requires energy, and Fr. Bellini had plenty, both physical and intellectual. He never seemed to tire , and we often struggled to combine listening to him and enjoying a meal. At the end, however, he always apologised: “Sorry, today I went on too long, right?” Come to think of it, he, too, must surely have got tired, his batteries run down, from long conversations with other people besides us. That might help to explain his choice of living alone rather than with his confreres. He was willing and open to talk about anything, going out of his way to create such opportunities, particularly in the case of the interreligious meetings with Buddhists which he attended for many years. Taking on so much and giving so much of himself at each encounter, he perhaps needed the time spent alone to recharge his batteries.



感動をもたらしました。

もしもし、マカダムさん、いらっしゃいますか。  
ベリーニです。……ベリーニでした。また電話  
します。

という寂寥感あふれる留守電のメッセージを最早  
聞くことはできません。そして三人の奇妙なレス  
トラン通いも終了したのです。

Fr. Bellini was a missionary to the end. Already in the hospice, his days clearly numbered, he phoned to confess to me his surprise at the number of people he encountered there who had only the flimsiest notions about Christianity. He had decided to spend the few remaining days of his life trying to remedy that.

His devotion to St Francis Xavier, after whom his missionary order was named, impressed me deeply. He had earlier sent me a picture of Xavier lying alone and sick to death on an island, his eyes fixed firmly on the crucifix held between his hands. Fr. Bellini was greatly attached to this picture. As his death approached, he let me know that he was at peace, trusting fully in Jesus as his forgiving saviour and friend and content to leave everything in his hands, confident that he would be well taken care of. His total trust in Jesus, expressed with such simplicity, impressed me greatly.

“Hello…hello…this is Bellini…hello……  
this was Bellini speaking. I’ ll call again.”

We won’ t have another chance to hear such quiet and calm messages on our answerphone. And our rather special visits to restaurants with Fr. Bellini have come to an end.

++++  
**編集後記**

今号は、聖母の被昇天の日に帰天されたリノ・ベリーニ神父様の追悼文をマカダムさんが奥様といっしょに書いて下さいました。皆様も神父様のことをいろいろ思い出されたのではないでしょう

か。  
広報部ではベリーニ神父様のご指導の下で教皇フランシスコの『福音の喜び』を読む勉強会を、

コロナでミサがお休みになる3月はじめまで行っていました。神父様は帰天されましたが、本も途中なので、メンバーで勉強会を続けています。神父様からいろいろ教えていただくことはもうできませんが、神父様が言っておられたことを勉強会の時間に思い出すこともありますし、学びが大切と言っておられた遺志を継ぐことができ



ばと思っています。また、ベリーニ神父様のお話をまとめたものを「今週の聖句と黙想」としてホームページに掲載しています。文体は変わっていますが、神父様の思いは伝わるとおもいますので、寂しく感じておられる方はどうぞお読み下さい。

ベリーニ神父様は最後、短期間でしたが、介護サービスを利用され、看護師さん以外にヘルパーさんも週に一度来られて掃除をしてくださいました。ヘルパーのKさんは若い男性で、結婚して子どもさんもおられ、3番目か4番目の赤ちゃんも奥さんのお腹の中にいるということを神父様は聞きだされました。「(コロナが広がる) こんな時に子どもを産むのはえらい。生まれたら、お祝いをあげたい」と神父様はおっしゃいました。神父様の病状はそれより先に悪化しましたが、神父様はKさんのことを気にかけて、お祝いの2万円を

病室で私に託されました。神父様の帰天の数日後、無事に赤ちゃんが生まれたようで、しばらくして、預かっていたお祝いもお渡しできました。受け取ったKさんは「ベリーニさんにはよくいただきました」と言って涙を流されました。「これからも天国から見守っていて下さいますよ」と私も涙ぐみながら答えました。

コロナ拡大防止か経済か、という議論がありますが、経済的投資は、こんな状況でも子どもを生き育てることにこそ向けられるべきでしょう。今年生まれた世界中の赤ちゃんとその家族に、ベツレヘムに生まれた乳飲み子イエスの祝福がありますように。そして、人類を危機から導き出そうとしておられる救い主の声を私たちが聞きとることができますように。

(マリア・ヨハンナ M.M.)



カトリック聖ヴィアートル北白川教会 2020年12月24日発行  
ホームページ：<https://www.stviator-kcc.org/>